

# 土木に対するスケープゴート現象とその民俗学的考察

田中 皓介<sup>1</sup>・中尾 聡史<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 東京理科大学嘱託助教 理工学部土木工学科 (〒278-8510 千葉県野田市山崎2641)  
E-mail: tanaka.k@rs.tus.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 京都大学レジリエンス実践ユニット (〒615-8450 京都市西京区京都大学桂4)  
E-mail: nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

近年の日本では土木に対する逆風世論が根強く存在しているものと想定されるが、メディア等で見られる土木批判の中には、その非効率性や不正さなどの、批判されるべき論点も存在する。一方で、度の過ぎた批判や、事実に基づいた批判とは言えないものなども散見される。理性的で建設的な批判であれば、その対象の改善が促されることも期待されるが、非理性的なバッシングであれば、土木事業が過剰に縮減され、真に必要とされる事業実施が阻害されることが懸念される。そうした非理性的な批判がなされる心理的背景として本稿ではスケープゴート現象に着目する。まず、近年の土木に対する批判的な言説の中でも、土木がスケープゴートとして批判されてきた事例を調査し、そうした批判的意識の日本特有の形成要因について土木を巡る民俗学的な視点から考察を行う。

**Key Words :** public works, newspaper, editorials, building a new Japan

## 1. はじめに

土木事業あるいは公共事業は、社会的・経済的基盤を整備し、良質な生活空間の構築や、自然災害に対して安心安全な国土形成のために行われるものであり、現代の日本においても重要な役割を果たしている。特に近年は、毎年のように日本の各地で発生する豪雨災害や、東日本大震災や熊本地震からの復興、今後その発生が予測されている首都直下地震や南海トラフ地震に対する防災事業、さらには2012年の笹子トンネルの事故が契機となり顕在化したインフラの老朽化対策など、国を挙げて取り組むべき喫緊の課題も多く見られる。

しかし、近年の日本の公共事業費はピーク時の半分以下の水準に留まっており、真に必要な事業の実施を困難にしていることが懸念される。

その要因として、土木事業に対しては国民が抱いている否定的な印象の影響が挙げられる<sup>1)</sup>。さらにそうした世論に対して少なからぬ影響力を持つ新聞報道が、公共事業に対して否定的な報道傾向に偏向していることもまた指摘されている<sup>(例えば2), 3)</sup>。

そうした土木に対する批判の中には、公共事業に関連した不正な金銭の授受や、ずさんな需要予測に基づく事業計画など、批判されるべき点があることは否定しない。しかし、のちに述べるように、事実を照らし合わせれば明らかに間違いと分かる批判や、明らかに度が過ぎた批判など、非理性的な批判がな

されていることもまた否定しがたい事実である。

もちろん、理性的で建設的な批判であれば、その対象の改善が促され、より良い土木事業・公共事業の実施に繋がることも期待される。しかし、非理性的なバッシングは、不当に対象を貶め、必要性や妥当性についての客観的な事実に基づく理性的な議論を困難とし、真に必要とされる公共事業実施が妨げとなることが想定される。

そこで本稿では、土木に対する批判的な言説の内容を検証し、その非合理性を明らかにするとともに、そうした非合理的批判の形成要因を考察する。そうして得られた知見は、土木事業を理性的な議論の下で適切に実施していくための世論形成に資するものと期待される。

## 2. 本研究の位置づけ

本稿では、単に、事実と反する土木批判の存在を指摘するだけでなく、複数の批判に通底する心理的要因を想定する。というのも、批判内容を、単に事実と照らし合わせてその正否を検証するだけでは、特定の批判の非妥当性を明確に示すことができるものの、なぜそのような非合理的な批判がなされたのかについては明確な知見を得ることは困難である。そこで本研究では、複数の批判に通底する心理的要因を想定し、個々の批判的言説の背景にその心理的要因

が存在し得ることを論理的に示す。

本稿では、スケープゴートینگと呼ばれる心理現象<sup>4)</sup>に着目する。スケープゴートینگとは、人々が曖昧な状況に耐えられず、早急に責任者を選び罰することで心の安寧を回復しようとする現象である。スケープゴートは他者の罪をかぶらされ「汚れた者」のニュアンスが強く、中世の魔女狩りやナチスドイツによるユダヤ人虐殺などはその典型例である。学校などの小さなグループ内で行われるいじめもまた同様の事例と解釈できる。

本稿では、非合理的な土木批判の事例として、戦後の日本において主要なメディアの一つであり続けている新聞記事を対象に、非合理的な土木批判記事を取り上げ、その非合理性を指摘するとともに、その当時の社会情勢等を踏まえ、スケープゴートینگ現象を論じる。

さらに、こうしたスケープゴートینگ現象は古今東西あらゆる場所で観測されるものであるが、そうした中でも、日本においてはその対象として土木がやり玉に挙げられているが、日本において土木がスケープゴートにされる要因について民俗学的な視点から考察を行う。

### 3. 土木批判におけるスケープゴートینگ現象の事例

#### (1) バブル崩壊

まず、朝日新聞の以下の記事に着目する。

「公共事業を増やしたせいなどで、政府の借金(国債発行)残高は90年度末の166兆円から12年度末には約700兆円に達する。」(朝日新聞2013年01月24日朝刊「アベノミクスって、なに?」)

「かつての自民党政権は道路や空港を各地につくり、「土建国家」と言われた。公共事業による景気対策を大盤振る舞いした結果、今では国の財政は約700兆円の借金の山だ。」(朝日新聞2012年12月02日朝刊)

このような、国の借金残高の増加が公共事業のせいだとする批判はしばしばみられるが、2012年度松の国債発行残高約700兆円のうち公共事業のための国債である建設国債が占める割合は250兆円程度であるという事実を踏まえれば、そうした批判は間違いであることが明らかである。

にもかかわらずこうした非合理的な批判がなされる要因として、バブル崩壊後の経済停滞という日本社会を覆う不安のはげ口として、土木がスケープゴートにされたと解釈できる。特に、バブル崩壊後の1990年代には、景気対策の目的もあり、公共事業費は増加傾向にあったものの、経済成長率が大きく改善するには至らなかった。

公共事業増加が、国債発行残高増加の一つの要因であることは否定しないが、上記の記事のような書

き方では、公共事業がその主要因であるかの印象を与えかねない論調である。

#### (2) 阪神・淡路大震災

『火暮るの墓』の作者として知られる作家の野坂昭如は、阪神淡路大震災から10日後の1995年1月27日に、次のような随筆を毎日新聞に寄稿している。

「(前略)東京に較べ、神戸の、焼跡からの復興は、おくれていた。拍車のかかったのが、昭和三十一年、国体開催以後。今度は、猛烈な勢いで街は変貌、南北に流れる川の川床は、崩した山の土を、埋め立てのため海へ運ぶ、ダンプカーの通路となった。訪れるたび、あらためて迷子になりそうな感じで、足が遠のいた。夕暮れ刻、西から阪急電車で近づき、武庫川を過ぎたあたりで、シルエットとなって浮かぶ六甲山系の姿だけが昔のまま。夕暮れ刻(どき)、西から阪急電車で近づき、武庫川を過ぎたあたりで、シルエットとなって浮かぶ六甲山系の姿だけが昔のまま。摩耶埠頭には、さほど違和感を抱かなかったが、ポートアイランドで、いやな予感がした。ぼくも、神戸には地震がないと信じていた。大震災を思ったわけじゃない。ただ、いかにもやり過ぎである、具体的に何がどうというわけじゃないが、「天罰」みたいなもの考えたのだ。他処者がとやかくいうことじゃないと思いつつ、胸のうちに、こんなことをしていると、今にえらいことが起る、ハラハラしていた。(後略)」

(毎日新聞1995年1月27日東京夕刊「一人勝手に落ちこんでいる」)

この随筆が震災後すぐに書かれたことを考えると、ここでの「天罰」とは阪神淡路大震災のことであり、その天罰を招いたのは、神戸港の埋め立てによるポートアイランドという人工島の開発であることを野坂は示唆しているものと解釈できる。つまり、野坂は、阪神淡路大震災という地震を天罰と考え、そして、その原因を、地震と科学的に因果関係のない人工島の開発に求めているのであり、スケープゴートینگ現象と解釈できる。

当該記事は一人の作家による意見にすぎず、すべての読者どころか、掲載した新聞社ですら、こうした考えを全面的に肯定しているわけではないだろうが、こうした言説と同様の感覚を、新聞社や読者も、一定程度は有していたものと考えられる。さもなければ、こうした言説がそもそも新聞に掲載されることはないものと想定される。

#### (3) 石油危機

田中角栄が政権を担っていた1973年には、以下のような社説が、読売新聞に掲載されている。

「人間軽視の暗い世相は、犯罪や事故にも投影されて、今年は、母親が、罪のない子をコインロッカーに捨てたり、むごい仕打ちで殺したり、内ゲバや金だけが目当ての殺伐な事件が多か

った。うやむやのまま年を超える金大中事件も、目的こそちがえ、人命軽視のあらわれといえる。こうした社会の荒廃ぶりは、成長一途の、これまでの政治と無関係ではないだろう。」(読売新聞 1973 年 12 月 31 日朝刊)

ここでは、無関係ではないだろう、という表現ではあるものの、社会の様々な問題あるいはその背景にある人間軽視や人命軽視と、成長重視の政策とについて、論理的な説明もその関係を示すようなデータもなく、あまりに軽薄にその因果関係を主張しているのではないかということが懸念される。この記事は、断定的かつ安易に、当時の社会問題の要因を列島改造論をはじめとする過去の成長重視の政策に帰属させるような表現である。

これは、石油危機を契機とした成長の鈍化による社会不安が生じたときに、それまで行ってきた成長重視の政策に、その成長の鈍化のみならず、社会の荒廃や公害、環境破壊などについても、過剰にその責任を負わせるような言説であると解釈できる。

#### 4. 民俗学的考察

3 で述べたように、ある社会不安が起こると、その原因として、直接関係のない土木が批判される現象が存在していることが分かる。では、なぜこのようなスケープゴート現象が起こるのか、それを民俗学的な視点から考察することとしたい。

##### (1) 民俗学とは

そもそも民俗学は、フォークロア(folklore)と呼ばれるが、フォークロアが誕生したのは19世紀中頃のイギリスにおいてである。産業革命が進行し、急速に伝統的なものが失われていく中、古い生活文化への関心が高まり、その中に自分たちの本質を見出すとして、民俗研究が開始された。

日本においても、近代化の発展の中で、農村が疲弊し、長年蓄積されてきた文化や伝統、また、それに対する誇りが急速に廃れつつあった昭和初期、柳田国男によって民俗学が提唱された。柳田は西欧のフォークロアを咀嚼し、日本独自の民俗学を完成させたのである<sup>5)</sup>。

柳田が民俗学の方法論について論じた数少ない著書の中の一つである『郷土生活の研究法』で、柳田は民俗学の目的を次のように記している。

「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ることである。社会現前の実生活に横はる疑問で、是まで色々と試みて未だ積み得たりと思われぬものを、此方面の知識によつて、もしや或程度までは理解することが出来はしないかといふ、全く新しい一つの試みである。平民の今までに通つてきた路を知るといふことは我々平民から言へば自ら知ることであり、即ち反省である。」(柳田, p.202)<sup>6)</sup>

ここで注目すべきは、柳田が「平民の過去」と述べていることである。柳田は、「平民の過去」もまた、歴史を構成する貴重な資料であるとして、政治史中心の歴史ではなく、総合的な社会の歴史、生活の歴史を捉えようとした。為政者中心の歴史から取り残されているように見える平民にも歴史があると考え、たとえ年代が明確にならずとも、そうした人々の生活や意識の変化から、日本の歴史文化を捉えることの重要性を柳田は主張したのである。そして、この「平民の過去」を知るとは、まさに「自らを知ること」であり、民俗学は自己省察すなわち「反省」の学問であると柳田は言う。

「反省」とは、自らの過去を振り返り考えることである。柳田は、現代の生活の中に見られる疑問はことごとく過去に形成されたものであり、それゆえ、過去すなわち歴史を知らなければ、現在を理解することはできないという立場をとった<sup>7)</sup>。それはすなわち、歴史の連続性を主張する立場であり、現在は過去からの累積として存在するという認識である。柳田は、「眼前の疑問への解答」(柳田, p.261)<sup>6)</sup>のために、現在と連続している「平民の過去」を知ることが民俗学の目的としたのである。

民俗学者の宮田登もまた、「私たちの日常のごくあたり前と思われる行動やものの考え方を生活文化とか生活意識といたりするが、それを歴史的に再構成して、文化論的意味づけを考え、歴史的現在としてとらえようとするのが民俗学の一つの目的である」(宮田, p.218)<sup>7)</sup>と述べるように、民俗学とは、現在の我々の生活の中に息づいている歴史を見つめる学問であると言える。

##### (2) 地鎮の民俗

さて、日本において土木がスケープゴートとして批判される要因として、日本においては古くから、土木の行いが神の怒りをかうものと考えられていた、という民俗学的な視点に着目したい。なお、そうした意識が現在の日本においても荒唐無稽なものではないことは、現代においても建設や土木事業を行う前には、地鎮祭を行い、土地の神の怒りを鎮めるのが一般的であることから見て取れる。

文化人類学者である米山俊直が、「世界最高の技術水準を誇る日本の土木工事が、神道式な開始儀礼(起工式)、終結儀礼(落成式)をもっていることには、非常に興味深い人類学的課題が隠されていると思う」(米山, p.42)<sup>8)</sup>と指摘するように、文明を発展させながらも現代でもなお古くからのアニミズム的な信仰を持ち合わせている日本人の特異性が、土木において顕著に表れていると考えられる。

この歴史は古く、奈良時代初期に編纂された『常陸国風土記』行方郡条では、村落の首長である箭括氏麻多智が、新田の開墾を妨害しようとした蛇身の

「夜刀の神」を打ち負かし、「此より以上は神の地と為すことを聴さむ。此より以下は人の田と作すべ

し。今より以後、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。冀はくは、崇ることなく、恨むることなかれ」と告げ、その場所に社を設けて「夜刀の神」を祭り始めたという話が書かれている<sup>9)</sup>。ここでは、神の領域を侵略していく人間の姿が描かれている一方で、自然を神の領域であると認識し、神の崇りを畏れる信仰がみられるのである。

そして、平安時代ごろから、大地には「土公神」が存在しているとされ、人々に恐れられてきた。土公神(どこうじん)は、『日本民俗学大辞典』において、以下のように説明される。

「陰陽道由来の土を司る地神。ドクウジン、ロックウサンとも呼ばれる。中世や近世には土木工事に際して、土公供が行われた。春は竈、夏は門、秋は井戸、冬は庭と遊行する神で、この期間に所在の土を犯すと祟りがあるとされた。大地神や地霊の性格が強いが、竈神・荒神・火の神と集合した。神体は蛇であるともいう。(後略)」(鈴木、p.205)<sup>10)</sup>

土中に「土公神」がいると考えられていたために、土木工事や建築によって深さ三尺(約1m)以上の土を掘削することは、「土」を「犯」すと書いて、「犯土(ぼんど)」とされ、人間の死や不幸をもたらす忌むべき行為とされていたのである<sup>11)</sup>。「犯土」によって生じる土公神の祟りから身を遠ざけることを土忌といい、『蜻蛉日記』『更級日記』『栄花物語』などの平安期の散文学作品には土忌がみられる。この犯土の意識は、現在もなお、九州地方において残存していることが報告されている<sup>12)</sup>。

犯土について、近年、土木学会の土木史の分野において、西山他<sup>13)</sup>によって研究がなされるようになってきている。西山他は、平安時代の国政運営の手引書である『朝野群載』の天延2年(974)の項には、この「犯土」という文言が記載されていること、そして、日記などには、10世紀から12世紀初頭まで「犯土」の記述があることを確認している。また、西山らは、『日本総合土木史年表』に記載された土木事業数を世紀ごとに纏め、8世紀に大きく土木事業数が増えるが9世紀から11世紀において土木事業の空白期が存在することを見出し、その空白期の一因を、犯土思想の影響によるものと考えている。

このように、地鎮の文化の背景には、大地に対して人為的変更を加える土木行為を、土地の神の怒りをもたらす、社会不安を招くものとする信仰活動が日本人の生活の中に古くから存在してきたことが考えられるのである。

1995年5月14日の毎日新聞には、「阪神・淡路大震災について私は学問的、科学的にはわからないが、神様が怒ったと言うとそれを信じます。淡路島北端に野島断層があります。明石海峡大橋の工事でドンドンと野島断層の頭を打ったので海の神を怒らせたと言います」、「海の神、山の神を怒らせたの

で、明石大橋工事は阪神・淡路地域が完全復旧するまで中止すべきです」(毎日新聞1995年5月14日大阪「青春講座」編集委員・津田康 神の怒りか)といった読者からの意見が掲載されているが、社会不安の原因を土木行為に求める信仰活動が色濃く表れているのである。

ちなみに、こうした地鎮の文化があったがために、土木事業に際して、土木技術だけでなく、地鎮の呪術も持った河原者や散所、声聞師などの中世被差別民が必要とされてきたことが近年、明らかにされてきている<sup>14)</sup><sup>15)</sup>が、このことについては、別稿で述べることにしたい。

### (3) 羽田空港の大鳥居

土木行為が、土地の神の怒りをもたらす、社会不安を招くものとする信仰活動信仰が日本人において強くあることを、民俗学者の宮田登は、次のように述べている。

「NHKの調査項目にこういうものがあった。

「昔の人は山や川、井戸やかまどに至るまで、多くのものに神とか神に近い存在を感じたり、神を祀ったりしてきましたが、現在生きているあなたは、こうした気持ちがよくわかるような気がしますか。それとも理解できないと思いますか」。この質問に対して、約75%の人が、昔の人の気持ちはよくわかるような気がしますと答えている。ということは、山や川や井戸やかまどなどと、このデータは少し古いですが、神羅万象には靈魂がこもっていると考えていることを認める民族性がある。人間は靈的なものに引かれるのでありまして、決して日本人だけの現象ではない。しかし、数字の上で、約75%というのは文明民族のなかでは高いものです。たとえばアメリカでも同じ質問をすれば、これを認める人は当然おられます。ただ、そのパーセンテージは三割に達するかその前後といわれている。日本とは逆の形になります。東アジアになりますと、中国の場合はもう少し合理的に出ていて、パーセンテージは低い。75%には達しないのではないかと思います。こういうものは宗教学ではアニミズム現象と考えています。こういうアニミスティックの傾向がありますと、靈魂の問題は大きな位置を占めています。」(宮田、pp.21-22)<sup>16)</sup>

宮田<sup>16)</sup>は、こうした日本人のアニミスティックな信仰を表す事例の一つとして、羽田空港の大鳥居の話を挙げている。

羽田空港は、戦後、連合国軍によって接収され拡張工事がなされるが、その際に、その地にあった穴守稲荷神社を強制退去させようとした。しかし、その神社の大鳥居を動かそうとすると相次いで事故が起こるといふ噂が定着し、土地の神である狐の祟りにあうので、それを動かしてはならないというタブ

一が出来上がり、羽田空港の駐車場に鳥居だけが置かれていたのである。この話は、1971年に手塚治虫によって漫画にもされている<sup>17)</sup>。

その後、鳥居を動かそうと、1990年代に移転が検討されるが、当時の新聞で、この移転話に取り上げられており、祟りの存在が語られている。

「昨年九月に新ターミナルビルが開業した東京・羽田空港で、旧ターミナルの解体工事が進んでいる。重機械がごう音を上げるその前に、鳥居がひとつ、取り残されたように立っている。戦前からこの地にあった、穴守稲荷神社の「一の大鳥居」だ。終戦直後、空港を接収した米軍は、大規模な拡張工事に着手。神社を強制退去させ、鳥居も何度か取り壊そうとしたが、そのたびに作業事故が起きたり、工事関係者が病気になったり……。『お稲荷様のたたりだ』と恐れられ、残されることになった、と伝えられる。今回の解体工事でも手付かずに残された鳥居だが、空港の沖合展開計画に伴い、すぐ近くに新滑走路ができるため、近く「立ち退き」を余儀なくされそうだ。」(朝日新聞 1994年5月18日朝刊「ポツンと「伝説」の大鳥居 東京・羽田空港」)

「羽田空港の元の駐車場にあった鳥居をご存じだろうか。初めて見た人は「なんで、ここにこれが？」と不思議に思ったアレである。江戸時代、ここは開墾地で、周囲の堤防が波に削られ、たびたび水びたしに。それで、“神だのみ”で、建てられたのが穴守稲荷神社。この鳥居は昭和に入って、寄進で建てられた。神社は終戦後に進駐軍の空港整備計画で移転。鳥居も撤去のため、引き倒そうとすると、鳥居の怒りなのか、ロープが切れ、けが人が出るなど事故が続出。それで、撤去は断念され、そのまま残ることになった。時流れ、空港は2年前に新ターミナルが完成、鳥居の場所は新B滑走路になることになって、鳥居は今度は「撤去」ではなく「移転」することになった。本社へりから見ると、高さ約5メートルの鳥居は周囲を鉄骨に囲まれ、“身体検査”のまっ最中。強度や地中部を調べ、移転に耐えられるかどうかを調べられている。もちろん、工事前には安全祈願祭を行ったという。鳥居様。あなたさまは撤去できません。ちょっと場所を移っていただけです。工事を無事やらせていただけますよう、お願いいたします。」(読売新聞 1995年10月11日東京夕刊「鳥居様どうかお移りを・・・」)

このように、移転話が進む中で、新聞でも祟りの存在が取り上げられている。宮田は、この移転話が持ち上がった時のことについて、次のように述べている。

「東京羽田空港の大鳥居は、羽田名物ということになっていたのですけれども、邪魔になるので何

度か移転話があったところで、偶然とはいいいながら、工事関係者に事故が起きたり、飛行機が連続して落ちたりした。それがあまりにも連続するために、祟りではないかという噂になったのです。」(宮田, p.10)<sup>16)</sup>

宮田<sup>16)</sup>は、鳥居を移転すると狐の祟りが起こるということを主張しているのではなく、あくまで、移転をすると狐の祟りが起こると考える日本人の信仰活動が存在することを主張しているのであり、「鳥居を移動するかしないかというときに祟りの話が必ず起こってくるというところに問題がある」(p.12)と述べている。

3.(2)で取り上げた記事では、阪神淡路大震災という天災と、明石海峡大橋やポートアイランドの建設が結びつけられたように、ここでもまた、飛行機事故や工事現場での事故が鳥居の移転と結び付けられているのであり、天災や不幸が起こったときに、科学的に因果関係のない土木的行為が、天災や不幸の原因とされるところに問題が潜んでいる。こうした事例は、江戸時代にも見られ、1704年の大和川付替工事では、工事に関わった姫路藩主の本田忠国が、工事の際中に原因不明の高熱を出し急死するが、それが、付け替え工事による狐の祟りによるものとされている<sup>18)</sup>。

これらのことは、日本人の生活意識の中に、天災や不幸を神の怒りや祟りと考え、その原因を、禁忌を破った土木行為と考える心性が存在することを暗示している。宮田<sup>16)</sup>は、「人間の理性はそう簡単に祟りというものを受けつけないですけれども、自分自身秘かに抱えている不安とか不幸が積み重なると、それと因果関係があると考えるのが人間の習性であります」(p.10)と述べるが、日本において地鎮の文化が存在することで、不幸や天災の以前にあった土木行為が、祟りをもたらした出来事として認識されてきたことが考えられるのである。

## 5. まとめ

本稿では、非合理的な土木バッシングに着目し、それがスケープゴート現象として生じている可能性を論じてきた。つまり、経済的なショックや、震災のような自然災害を契機に社会に不安が生じた際、土木をスケープゴートとして過剰にその責任を負わせるような言説が、主要なメディアである新聞においてみられることを指摘した(3)。

一方で、4.では民俗学においては、土木という行為が神の怒りをかい、祟りをもたらす、という意識が日本人の中に存在することを論じた。

つまり、日本人には、土木という行為が人智を超えた影響を及ぼすものという意識があり、それがゆえに土木は過剰にその責任を負わされやすく、スケープゴートにされているものと考えられる。

なお、スケープゴートは汚れた者としてのニュア

ンスが強いことが指摘されており<sup>4)</sup>、日本において、土木従事者は「汚れた者」として差別されてきた歴史が存在することが、中尾ら<sup>19)</sup>によって明らかにされているが、こうした点からのスケープゴートとしての土木（特に作業員）については、別稿で纏めることとしたい。

#### 参考文献

- 1) 田中皓介, 神田佑亮: 公共事業を巡る各種言葉のイメージ変化要因に関するパネル分析, 土木学会論文集 F4 (建設マネジメント), Vol.70, No.4, pp.I\_13-I\_25, 2014.
- 2) 田中皓介, 中野剛志, 藤井聡: 公共政策に関する大手新聞社説の論調についての定量的物語分析, 土木学会論文集 D3, Vol.69, No.5, pp.353-361, 2013.
- 3) 田中皓介, 藤井聡: 米国一般教書演説を巡る大手新聞社の報道内容分析, 土木計画学研究・講演集, Vol.51, 2015.
- 4) 釘原直樹 (編著): スケープゴート—誰が、なぜ「やり玉」に上げられるのか, 有斐閣, 2014.
- 5) 福田アジオ: 「民俗学の目的」, 福田アジオ・小松和彦編『講座日本の民俗学 民俗学の方法』, 雄山閣出版, 1998.
- 6) 柳田国男: 『柳田国男集 8』, 筑摩書房, 1998
- 7) 宮田登: 『宮田登 日本を語る 1 民俗学への道』, 吉川弘文館, 2006.
- 8) 米山俊直: 土木と信仰—日本人の宗教観と生活, 土木学会誌, Vol.77, No7, 40-43, 1992 .
- 9) 秋本吉徳: 『風土記(一)—常陸国風土記』, 講談社学術文庫, 1979.
- 10) 鈴木正崇: 「土公神」『日本民俗大辞典 下』, 吉川弘文社, 2000.
- 11) 深澤瞳: 『狭衣物語』の土忌, 倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』, 森話社, 2010.
- 12) 服部英雄: 『河原ノ者・非人・秀吉』, 山川出版社, 2012.
- 13) 西山孝樹・藤田龍之・知野泰明: わが国の平安時代における「土木事業の空白期」に関する研究, 土木学会論文集 D2 (土木史), vol.68, No.1, pp.123-131, 2012.
- 14) 三鬼清一郎: 近世初期における普請について, 名古屋大学文学部研究論文集, Vo.89, pp.173-185, 1984.
- 15) 市川秀之: オワリ衆の伝承を追って—近世の池構築造技術者集団—, 近畿民俗, Vol.125, pp.1-15, 1991.
- 16) 宮田登: 『都市とフォークロア』, 御茶の水書房, 1999.
- 17) 手塚治虫: 「新・聊齋志異 お常」, 『手塚治虫文庫全集』, 2011.
- 18) 藤原秀憲: 『大和川付替 (川違え) 工事史 (治水の恩人 中甚兵衛考とその周辺)』, 新和出版社, 1981.
- 19) 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡: 「河童の民話における土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究」, 実践政策学, Vol.2, No.2, 2016

(2018. 07. 317 受付)

## CIVIL ENGINEERING AS SCAPEGOAT AND A STUDY FROM FOLKLORIC PERSPECTIVE

Kosuke TANAKA and Satoshi NAKAO